

まんが王国・土佐推進協議会 平成 30 年度第 2 回総会（概要）

日 時：平成 31 年 2 月 15 日（金）14:30～16:00

場 所：高知共済会館

出席者：まんが王国・土佐推進協議会委員 14 名

オブザーバー 1 名（内代理出席 1 名）

監事 2 名

（1）会長挨拶

（2）報告事項

次の報告事項について、事務局から説明の後、意見交換が行われた。

第 1 号報告 平成 30 年度（下半期）「まんが王国・土佐」ブランド化の推進について

- ・第 5 回全国漫画家大会議 in まんが王国・土佐の概要
世界まんがセンバツについて
- ・平成 30 年度まんが王国・土佐ポータルサイトの運営状況
- ・平成 30 年度まんが教室の開催状況
- ・平成 30 年度まんがを活かした「コンテンツ創造教育」の推進状況
- ・海外との交流について

（3）議事

事務局から次の議案について説明があり、承認された。

第 1 号議案 平成 30 年度まんが王国・土佐推進協議会収支決算見込

第 2 号議案 平成 31 年度まんが王国・土佐推進協議会事業計画及び収支予算

（4）協議事項

次の協議事項について、事務局からの説明の後、意見交換が行われた。

第 1 号協議 第 28 回全国高等学校漫画選手権大会（まんが甲子園）について

第 2 号協議 第 6 回全国漫画家大会議 in まんが王国・土佐について

（5）閉会

次年度第 1 回総会は、2019 年 9 月中旬を予定

<意見交換概要>

第1号報告 平成30年度(下半期)「まんが王国・土佐」ブランド化の推進について

第5回全国漫画家大会議 in まんが王国・土佐の概要及び世界まんがセンバツについて

【A委員】

- 世界まんがセンバツの計画をお聞きした時点では面白いなということと、全くつかみどころがない、応募がこないのではないかと思っていたが、こんなにたくさんの応募数があった大変驚いた。
- 予選審査の審査員の先生方も結構、審査がヘビーだったと思う。これまでずっと地道な広報活動が実を結び、まんが甲子園も年々増えてきている。
- 私が1番驚いているのは、海外の方がオチをちゃんと付けられるようになったということ。今は日本のまんがとほとんど変わらない。
- 言葉が分からないが、世界とスーっと一つになるという実感が持てて、これはものすごく大成功の企画だったのではないかなと思った。
- 次から発展する匂いがあるのですが、予選を落ちたところも、応募したけどそれっきりだよみたいなことにならないで、ご縁が消えないように、つなげてあげなければならないと思う。
- (全国漫画家大会議の案について)総体的に拝見していて、素晴らしい。これだけ交流会議をしながら、様々なものに目を向けてまとめていくということは、他に類例はない。
- 表現方式にジャンル別の壁はもうなくなって、いかに説得力のあるものをつくっていくということだけが、課題になってる。

【B委員】

- 世界まんがセンバツは「世界」と付いているからには、やはり世界を目指してほしいと思う。
- 産業の売上げでも中国が非常に高くなってきているので、ここでやはり何とか上海の高校生たちに入ってきてもらえれば、もっと盛り上がるのではないかなと思う。

【吉村部会長】

- 「世界まんがセンバツ」について、応募が1校でもあった国の大使館に、報告に行ったらどうか。

【C委員】

- A委員からもお話があったように、まんがは言葉が分からなくても、内容がすごくよく分かる万国共通の部分がある。
- 昨日までシンガポールへ行ってきたが、シンガポールで非常にまんが甲子園の人気が出てきてすごく行きたがっているという話を聞いた。
- 情報が届けば、各国とも参加者が増えてくると思う。届け方をいろいろ検討されたいかなと思う。

【D委員】

- 世界まんがセンバツとは、私もどうなるのかなというのは注目していた。「甲子園」と「センバツ」をもう抑えてしまったというのは、高知県のやったもん勝ちということで、これはすごい良かったと思っている。これから、どう広めていって一人でも多くの人に知らしめて、自分たちも参加していこう、出していこうというところにもっていくのが重要なのではないかな。メディアとしてそのサポートとお手伝いができればというふうに思っている。

【E委員】

- 世界まんがセンバツは絵だけ見ても本当に面白い。言葉が分からなくても理解できる。しかし、あのセリフ、何て書いてあるんだろうという興味もまた一方である。例えば入賞作品をネット上で公開するときに、セリフも、枠の外でいいので、現地の言葉で紹介されているようなページをつくっていくと、次回の応募につながっていくことになろうかと思う。

【尾崎会長】

- 考えてみたら、まんが甲子園の日本の子どもたちがつくった入賞作品なども、本当は外国語に訳して展開していくと、外国からの応募増とかにつながっていくだろう。
- 全国漫画家大会議に、漫画家の先生方が来てくれて、そこでお話いただくことを聞くというのが、そもそもこのイベントのスタートだったのだが、漫画家の先生たちに若い人たちのパフォーマンスを見てもらおうという機会にするといった形にすると、劇的にイベント参加者は増えるかもしれない。

【吉村部会長】

- （現在計画している）世界まんがセンバツの決勝のトーナメントのやり方が面白いので、それを皆さんにご紹介したい。
- 柔道のようにトーナメント形式で、まんがセンバツの優勝作品が決まる、見ても面白い、ちょっと話題性のあるような、世にも珍しい審査方法を今度試してみようという事務局と話している。

【尾崎会長】

- いろいろ考えたら面白い。それをまた全国発信につなげていけるようになればいい。また、突き抜けたアイデアを考えていただきたい。

平成30年度まんが王国・土佐ポータルサイトの運営状況

【F委員】

- ブランド化であるとか周知という部分で、高知に人が出入りする玄関、高知空港や高知駅という場所で、例えば「世界まんがセンバツをやってますよ」というPRを出せたらいいと思う。
- 例えば高知空港は「空の日」という日に合わせて、レベルの高い世界まんがセンバツの作品などが高知空港に飾られている期間があれば、何か反応する方々もいらっしゃるのではないかな。

○コンテストの前後に、高知県がこういった世界まんがセンバツをやっているんだというのを、周知する場所としてはいいのではと思う。

○県内向けでいけば、県民であるとか、一般の市民にどうやって広げるか。人が集まる目につくところで宣伝すればいい。

【オブザーバー（文化庁）】

○インバウンドの関係の予算ではあるが、文化庁に空港等で行うまんがとかアニメ等のメディア芸術を活用して文化財を紹介する事業がある。空港等で地域の文化財を紹介しつつ新たなものをつくるというような事業なので、一緒に盛り上げていくということは可能かと思っている。

海外との交流について

【D委員】

○海外の交流のところで、昨年末に前回優勝した韓国の高校（の来高）はすごくいいネタで、まんが甲子園へのフォローアップというか、アニメとかまんがとかの情報番組もあるので、そんなところで、こういう高校生が来て研修した、高知県に来た、といった情報があったらメディアとして取り上げていきたい。

○このような情報をいろいろ提供してもらってより立体的に高知県のまんが文化を世界に発信するぞというのを、お手伝いできるんじゃないかなと思う。

その他

【G委員】

○公益社団法人日本漫画家協会の事業担当理事というのをやっている。

○日本中の自治体からまんが王国としていろんなアプローチがあるが、高知県ほど早い時期から、まんがへのアプローチがされ、今熟成してきて芳香を放っているという状態になっている地域はない。まんがが勉強の敵だったときから、ジャパंकールになったという一番大きな力というのは、私は高知県にあると思っている。

○皆さま方の決意というのを、どこまで押し出していくか。量ではないよ、質だよということを出していくのかという時期に入っているんだということ漫画家協会の立場から申し上げて来た。

【H委員】

○商工でまんがを使うという部分であれば、例えばいの町であれば、今年12月の産業祭というイベントで、町内にある県立伊野商業高の生徒さんと一緒になって、映像の編集で動画をつくったり、もしくはまんがを描ける生徒さんと一緒にデザインしてPRポスターをつくったりということを今、校長先生と協議しているところ。彼ら、彼女らが持っている特性というものを使って、町の産業を広めていこうと考えている。

○これが一つのモデルとして広げていけるように、再来年に向け、恒常的な形でしっかり根

付いていけるように流れをつくっていきたいと思っている。

【尾崎会長】

- 今回、ナンコクフェスティバルとのタイアップを南国商工会の皆さんとやらせていただくが、南国市には海洋堂さんとタイアップしてクリエイターを育成するものづくりサポートセンターができる。商店街の空き店舗を利用して、いろいろ発表などするという拠点が南国市に恒常的にできる。

【H委員】

- いろいろな地区の商工会のそれぞれの分野でまんがというのを視野に入れてやっている中で、連合会として（県内の動きを）集約していくようにしている。

第1号協議 第28回全国高等学校漫画選手権大会（まんが甲子園）について

【I委員】

- 2020年に高知県で全国44番目の総文祭がある。全（定例の）19の部門の他は、あと四つ、五つぐらいは各開催県で県独自に定めることができる。その中で高知県はまんが部門を立ち上げた。高知県が初めてだ。

【C委員】

- 教育委員会の方も2020年の総文祭で、まんが甲子園やよさこいは、全国、世界に向けてPRする重要なコンテンツだと位置付けしている。しっかりと連携を取らせていただきたい。大会期間中も含めて、まんが甲子園などは全国、世界に向けてPRしていく。

【F委員】

- まんが甲子園のボランティアの学生さんにちょっと脚光を浴びていただけないかなと思う。
- メディアの方にはお願いですが、来年総文祭で、いきなり「甲子園って何」というよりも、その前に事前に仕込みじゃないですけども、高知県はこんなことをやってるんですよというのを含めて、まんが甲子園全体の進め方とか仕上がりとか、そういう事前の仕込みをすれば、何かちょっと全国的に盛り上がるようなことができないか。
- ボランティアスタッフの高校生もまんが甲子園に関わっている。もしかしたら、彼ら、彼女らは予選で落ちているのかもしれない。それでも、負けても自分たちも関わりたいなところから、もしかしたらSNSとかの発信とか、彼らのモチベーション、翌年のモチベーションにつながる、などというのもあるし、彼らの発信なんかも結構大きいのかなと思う。（高校生ボランティアスタッフは）当日白いTシャツを着て（大会を支えているが）、なかなか一般の方々は分からないと思う。
- 現場に来ないと分からないが、それを現場に来なくても分かるような何かお伝えの仕方ができればいいなと考えている。

【J委員】

- まんがセンバツで優勝した作品とかはどこかで見れる機会があると思うが、入賞できな

った作品も見られるようにできないか。

- 例えば、もう一度、自分たちの作品と優勝した作品を見比べられる機会があり、その機会を利用し、もう1度見に来高知へ来ていただくとリピーター化するという可能性がすごく高い。その若い方たちが育ったときに、もっともっとリピーターが増える可能性がある。
- 現在の若い人たちの子どもたちというふうに、もっと先のことを見越したときに、そういう観点もあるのではないか。自分の作品がどこかで飾られているというのは、すごく面白いのではないか。
- 2020年こうち総文は初めてのまんが部門ができるという話もあるので、観光として何か上手に連携ができるのであれば、ぜひ協力させていただきたい。

【門田議長】

- まんが甲子園の予選、本選作品は、ホームページで全て見られるが現物は見れないので、来年度、整備をしていく施設の中で展示していく。聖地として（観光資源として）活用していきたいと考えている。

【K監事】

- 市町村振興協会としては、県内市町村の総意でもって、まんが甲子園のご支援をさせていただき、このまんがが高知の文化の本当に大きな柱の一つになるように、お手伝いさせていただいているところ。
- 高知市中心がイベント会場だったが、このまんが王国の取組が徐々に高知市以外の地域に広がって行って、県内全体がまんが文化の振興に進んでいけばいいと考えている。

【B委員】

- 2.5次元舞台にはまっているが、参加者は20代前半か10代後半の人ばかり。なぜ彼女たちがはまっているかというと、多分2.5次元舞台は、アニメーションでありゲームであり、2.5次元の役者さんたちは、みんな歌えるのでミュージカルでもある。だから、まんが甲子園にもやはり何かミュージカルを取り入れてほしい。
- いろんなことの融合が大切だとすごく思っていて、まんが甲子園もいろんなことをゆくゆく融合させていけば、結構すごいものになっていくんじゃないか。
- やなせたかしさん、あの人は何がすごいかというと、やっぱり絵も描けて、詩も書けて、歌を歌って90歳を過ぎてダンスを踊ってたのがびっくりした。
- ただ、まんが描いてりゃいいよじゃなくて、全てを融合していけないかなという気がする。

第2号協議 第6回全国漫画家大会議 in まんが王国・土佐について

【尾崎会長】

- 今回の計画ではまんが・軽音ライブをやることになっているが、もう少し仕込み方などを工夫して、面白くし、さらに表現の幅を広げるようなことは考えられるかもしれない。

【I委員】

- （全国第44回の総文祭は）全国に発信するとってもいい機会であるので、まんがと軽音楽は結構、相性がいいように思う。この軽音という部分も高知県は結構、元気にやっているのので、2020年は軽音部門もやる。その二つが同時にできるのは、やっぱり高知県だからこそになってくるので、上手にPRしていくことはできると思う。

【吉村部会長】

- 高知の軽音楽部の高校生たちのレベルはすごく高い。総文祭に高知県でやっているまんがと、軽音楽の部門ができるのであれば、まんがイベントとも連携ができたらいい。
- 高知には、漫画家がやっている「マンソنز」というバンドがある。
- このマンソنزから日本全国の音楽をやっている漫画家に声かけをして、ライブなどをやると、まんがと音楽の融合を表現できるんじゃないか。